



秋 五 麻 黄

卷

15
75
1



金剛經

門僧 5
號 75
卷 1

伊
厚
合

秋夜夢之卷之一

目錄

北野轉輪寺貫通文

手澤先生文

林宗山公評法華書付字

天台坐主師辭表

相撰改定并行自表一由疏

見教錄

書庫

油
書
石
不用

遠くも何事かいふ心はてしなくしや祥の
棒も又出さばいふやふの清き生々本心沙
法も亦案か一因合点甲うん

因に記す享保年有れ本合正祥ハ元ハ根
座乃ち代しやむめく壯多しや敷心
東彼等ラ破る仲衣と為く紅を扣す清と
仰徊して世ふらあさる世人色に評メ上
百 文徳帝の清字のあはれ米書雲上
人の扱ふも沙ほせが古も無りしやん

修し得偏人多々て清水取ル一守と煉を
一西祥院と号し一竹道の御本あるん
の御四厨と相領して中堂とあり一寺内
法清より見てうらう又洛東日ノ景清の事
牛のきこはと事揚ると憐れとて御ふ石
とあて牛の骨と敷ふ元文寛保の以ふ存て
寂せし又元文の以小相谷正補るの園巻を
室杜多ハ中も所ふ親しや文きりは元
本道心者もて所務め法の細し生覺論

何乃僧之例之貴とあり然とあり法人の
要休之態趣之是ハ生受りて争て論カウラふ
此も故小世人波す小者信一子も是も正林
寺と具之——是も序あり——佛四厨を掲て
之毎の十月小丹光大師の法云法事と節
と法人群とあり日本山智恩院の法云執行
小者出さる振ふ付と同一——せと智恩院
僧正も右両名の中——兼法者とかやう振ふ
名もはしとの元生涌出せと居りて自身

終了と云衣及心者の作りて曉るる身
はらきと云是出いとと好勝之也——
貴通ハ宗旨乃平山智恩院にても在
るも縁者——とかや出也云ありといふ也
○人の所乃しめてある正とるる中と新と
ハか云海流石流の海流邊ハの取如ぬや
天の心のちやぬきまふも流生をよると評
海見先生ハ元政石田先生ハ人たるはと云
自見の一道とえて偽仙者花と混——云々

ある者を以て凡人と歎くべしといふもの
物と信じて故に諸人接待の如くしてありて是
と信じて若くは一を交年迎ふを帰し
奴婢の如くして日毎月毎一人お供する
を不逆色といふは世帯に似てし事と称
しといふ凡四五子人ふたりとて又ハ倫中の
扱ひ物と被りて又その扱ひを以て此
子と扱ひ偏ふ大重の再本めりて最ありと化
なり物といふ識るべしあり候ともいふなり

教乃こゝといふ人子中心の事なるは是を存心
奉りて者あり免許をいふしやうく一おめ候
事ハ免しは是中心の事ハ庸人の容易
く成就するべしといふ候も人ハ僅の伎藝
を以て真の事ハ修行と候ても是れわづら
く況人道乃大なる事一藝の如く免許あり
之事ハ古例とありて是れを以て衆を
勵むるに為すべしといふ候も是れ中心の事
ハ神の御心なりといふ候も是れ中心の事

祥の文情母比き心も知し移るも史とい心
習ふく一既小治を申す係れりては
人と圖より得るおとす人小治を却て本
心違れりか悟して人と好ふとて疑ひも
あつて左方より其免許却て人の害りや
成りし被るは内小彼先生も彼一也と
業權の湯りてこちが早うか

○寛政二戊子林文政の文 作後海書付寫

林文政の文

糸学より後ハ長心文 洋代ハ洋信用
海事より既其方交代ハ右学凡辨物事
作付まの係りては天乎地乎正字お廟門人其
反を可や答に就必道は世と種に新視に既
と出りて其字海行凡信と破る教有る金正
学言識ありて其長心洋書に其字門人共
一内ハ存右作字術純正なりて其も抄節
有る類におまへに必何にハ其度重々洋
夏より歳より其作付業野其助長田法也

之可中書

五月

林大學院

世宗孫家... 門人... 宗... 書... 字...

...

○寬政二年六月十二日武家傳 卷之... 妙法院

伊門主... 相達... 書付

內裏燒亡之帝... 依... 暫... 聖... 院... 院...

...

皇居... 此... 有... 農... 業... 之... 妨... 且... 以... 狹... 少... 兼... 臨

有御差... 問... 之... 事... 有

遷幸妙法院室...

作... 出... 路... 上... 之... 事... 加... 急... 檢... 知... 火... 後... 毒... 竹... 白... 之... 事

遷幸有... 乃... 問... 之... 事... 之... 事... 猶... 緣... 之... 中... 難... 去... 事... 子...

也... 事...

女院... 遷... 妙... 法... 院... 室... 之... 保... 佛... 之... 及... 兩... 沙... 石... 之... 先

後

禁... 中... 之... 事... 妙... 法... 院... 其... 後

女院... 遷... 幸... 心... 外... 不... 慮... 其... 體... 之... 教... 以... 此... 帝... 朝

内表造官渐可修其功也

迁幸州法院室之便可有清沙石也於个
方安室亦方亦建先新

内表 迁幸

仙洞法院退之可有 迁幸 自室东言上以
之牙个方其宸殿身之復上古之例
制於清源殿也如旧保身造立之与用连加增
可為莫古之加於園东一之也

而内府造学之系

殿感群不孩以信之也愿能制清源殿也
質之素一統帝俊之保之 俾出度依

廷幸妙法院室

女院更清源他新也於 迁幸保博也及
支度費用亦之保之對室东清源也
事故不之均止 迁幸妙法院室之清源也
个方之文停止也新

内表 迁幸之治定也右能之均止也神小院

西代之招可有清源清源清源清源

因月辭表法因寺以年持齋

法被蒙天台座主職狀

有真仁濟心廣方寸久崇常願之職心
故屢石合時宜不能一也蒲押之似覺
苦病不能也治山五年未得選覺不能
之也者此之不能所以職較之者慙于心
願法王中才學之能定

天覺令直仁最常願之職聚基用之情何
幸加誨不任遙欽仰心聞法仁誠博誠忍

頌首

寬政二年二月廿六日 天台坐主三品

直仁親王

同七月十八日願年所使

文祥天台座主事

解狀之類報終止

嚮 新内裡 仙洞 女院等 亦法

淨修法所内之意 仰出加之 法誓勵行
有妙譽終末被乃忙事之止罷職之悲

藝者お修ふ衰しくはあしき事人等
おまじ天のまはさる上におみさる人出
好い事や寛政ふ改りてりし勅旨鏡世丸
目と遊し正るるを改の字いふと始ては是
用ふ中華ふも宋朝の政和の号者しり
おし和漢例しと字しりしか今天も是を
流ふや寛政の文字さるは時ふあまると
うれ上におま人とほしきおのう下之ふ儼て
くふ人藝者おまらぶし寛政二のには角か

夏は若州小冊川と云ふ人乃若く 藝中乃
市沙ほしして其の禪と湯やしりし
人は念ふ禪の禪めておるとかや和漢の
石家遊て下し板而えの谷丸を介せふ名を比喩
刀ふともあはくしりし例沙と石はしりし
てしあらる人なり其の禪者し時常とや云ふ只
一通しめては禪と遊ゆふしそのありあやと
しきおとししお撲の年中とすしはしき者なき
し奥ふお撲行司のあしとあしとあふちりし細川

あふまの事地五百と云ふ昔田原に居るといふ
る中宮政元爾自公保く申侍所侍有と書
付方と云ふ一たふ字と

一相撲と云ふ

天照太神の御付の始

朝廷と云ふ

聖仁天皇御宇にお撲の事會行ハ世に傳
未于傳法不心事ハ臨而こし事成傳而之載

以定か

聖武天皇神龜三年壬子壬子都に於て追ふの事
志賀の清林と云ふ者より所行司ふ事と云ふ
お撲ハ武事と云ふは後ハ子孫にお撲ハ如る
年兵亂少後常を行りの事志賀く後ハ月
然と云ふ傳は

一後事如院文治年中再お撲ハ常會不云
行度志賀承以絶しとて所行司てお和夫
事ハ常ハ所行司如也と云ふ能去同平後

丁亥... 實信... 名達

殿... 任... 位... 追... 名... 緒... 別... 延... 而... 撥...
... 行... 司... 之... 成... 之... 下... 之... 之... 之... 者... 蒙

勅... 常... 時... 召... 合... 也... 用... 以... 本... 叙... 押... 子... 王... 之... 而... 園...
... 殿... 之... 緒... 之... 代... 之... 撥... 常... 會... 之... 所... 式... 之... 初... 以... 之... 如

又... 以... 常... 久... 之... 兵... 乱... 之... 常... 會... 也... 中... 絶... 仕... 也

一 正親町院... 而... 福... 皇... 中... 之... 撥... 之... 常... 會... 之... 行... 也
... 第... 十... 三... 代... 月... 追... 机... 之... 所... 以... 例... 也... 初... 也... 也

一 元龜... 中... 二... 条... 園... 白... 鹿... 良... 公... 之... 日... 本... 之... 撥... 也

法... 二... 流... 也... 之... 所... 以... 也... 一... 條... 法... 机... 也... 也

園... 殿... 并... 烏... 鴨... 子... 持... 衣... 袴... 唐... 衣... 四... 幅... 袴... 也

主... 以... 之... 後... 信... 長... 公... 之... 考... 吉... 也... 持... 及... 標... 席... 代... 也

度... 之... 所... 以... 撥... 之... 式... 也... 初... 也... 也

一 十四代... 月... 追... 机... 朝... 延... 也... 之... 所... 以... 撥... 之... 式... 也... 初... 也... 也

元... 和... 元... 年... 之... 紀... 別... 初... 奇... 也

東... 照... 之... 所... 以... 撥... 之... 式... 信... 也... 初... 也... 也

有... 之... 所... 以... 撥... 之... 式... 也... 初... 也... 也

信之師の一掃為戴仕の

一十五代目遊丸小

朝廷の御座之帝會も自然と馬中絶成り
中二条様御座り申す申す申す申す申す
目下御座り申す申す申す申す申す申す
申す申す申す申す申す申す申す申す

一文福年中

常信院攝物御座り申す申す申す申す
上覽之帝御座り申す申す申す申す

中仁入門之申す申す

將軍表

上覽之式一通及御座り申す申す申す

文部之御座り申す申す申す申す申す

禁裏之御座り申す申す申す申す申す

今以御座り申す申す申す申す申す

一當時法御座り申す申す申す申す申す

家代之御座り申す申す申す申す

右之通御座り申す申す

十一月

吉田善房

古書付の題めてハ世方ハ野川
免祥の事も傳へ申し有る
事や御退考

白川後山十二宗の的所抄字

見救鑑

又天地の陰陽有ハ人ハ夫婦者是自然
の道く上下の人を申す婦として降ハ
是も婦も皆天地の氣と結して生さる事
死生奪有富者上下有命者ハ富貴も
くけし一とくハ父母の命ハ是道も
孝行のそハ神身といふ也

古書付の
白川後山

しよの忠ぶあまの心かひのこまかしくし

忠

父母に孝子に敬ぶるは人の徳なり

孝を尊ぶるは徳の徳なり

子に孝ありては父母の徳なり

徳を皆方と撰ひて徳の徳なり

徳の徳なり人を尊ぶ徳の徳なり

徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

徳の徳なり徳の徳なり

の心成等一と云

右ハき子の由ルぬと云と書付せす中
ゆれ七の年睦月朔一武蔵の例ふ云
そを

右見教編一卷と書

儲君定國云し

松平賢九君編集し

公長村談と十有と云

下玉流ふ云と云

大撰書然や一云ふ

の一云代あるや是と

この書と云下度し

の姫風風の印と云

所多移と云し

極果備降と云し

と云し

明和七定江生仲七日宿

寫之

落合誠智通氏

附録 其朝日白川定信侯の實は國母の所子ト云り
是の記知れ定國侯は字子トアリ余何可遊者

天明七丁未己秋八月白川侯傳代官ノ

廿九

一百姓ハ國の本母テ百姓の辛勞と云フ一飢寒
ヲモ招クと云一不ヤ事

一百姓の乳弟も近々學業精進する事自業
も高くと振ふお成は付も余も抱ふも物也
も入る宗守付作方も不巨敷年行の事也
以不可知の事及いハ平是兩代官の面ハ心

は遠方者も付心々急があらハて衣食
任と保勿得聊業業精進する事一之も
事ノ節候お用ハ百斗事も手代ハ伊也也
自身勤し保身也ハ百姓ハ上ハ遠く目
下下談一振ハお成は付下執事一 招御者
ハ振ふる事不ヤ事

一形ハ新敷お屋上ノ也一之招押事ハ
事との心振ら振ハ振ハ付下懐ト遠
くハ心ハ事ハ振ハ事ハ振ハ付

帝之下は春も止了り乃降新或は下衣
へ春も止り指お成り舟中入用おし目
におさす下し及強家の指お成り事
不可成り

一山栴竹栴採し不可伐採名古来より制禁
し却迎來諸おし多荒れ指お成り自
る國用令を川にも埋れ水おの憂も
は保身前条古より制禁し保かすお
ち首栴極き事は引下中付事

一迎奉一己の切とさすは為る運と又は新田
おし家の中お水久くも采も不る中し
却て荒れ指お成り或は用水令を
河橋も用窮し及し一殿中指お成り事
重役も若甚し不可成り事

全卷

秋乃愛子印卷之三

油
町
山
店

